

「ウォーカブル」なまちづくりが地域のにぎわいをもたらす

株式会社 野村総合研究所

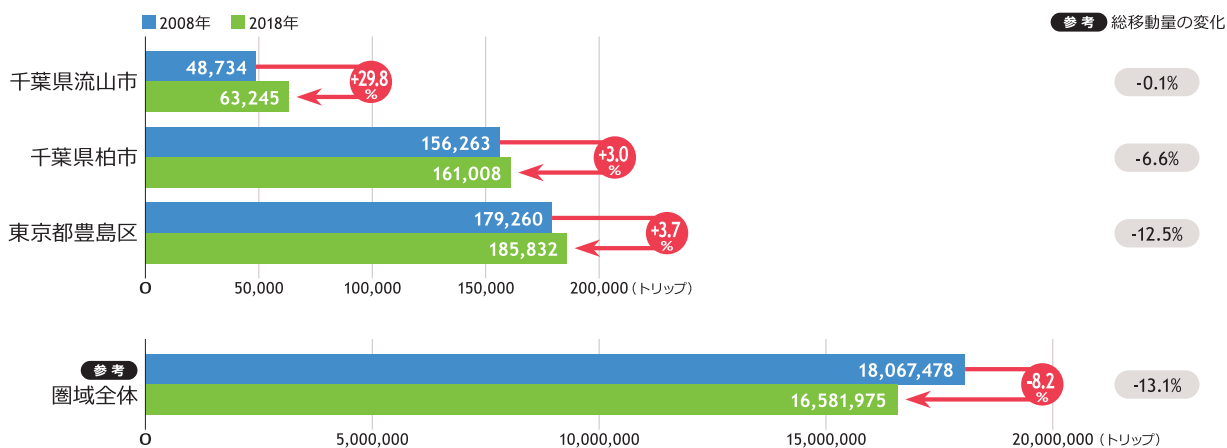
社会システムコンサルティング部 コンサルタント 廣津 奈緒子

居心地が良く、暮らしやすいまちづくりとして、「ウォーカブル」をキーワードとした取り組みが国内外で注目されている。例えばパリでは、学校や職場、スーパー、病院、公園といった施設に、徒歩または自転車ですぐにアクセスできる都市づくりを進めている。国内でも「ウォーカブル推進都市」として、国土交通省が推進する「居心地が良く歩きたくなるまちなか」づくりに賛同し、取り組みを進める団体が増えている。その数は2022年7月時点で329団体に上り、ウォーカブルなまちづくりが加速化している。

ウォーカブルなまちづくりでは、車移動の利便性を重視した従来のまちづくりから、市民中心のまちづくりへとシフトし、徒歩移動の快適さやスムーズさを兼ね備えた環境づくりが進められている。徒歩での移動量が増加することで人々の交流の増加や健康増進が期待されるだけでなく、国土交通省の「まちの活性化を測る歩行者量調査のガイドライン」では、歩行者量はまちの経済的な活性化の指標となる小売店舗数や売上高、地価と一定の相関があることが示されている。歩行者量の増加はまちのにぎわいを表し、地域活性化においてもウォーカブル推進の意義があるといえる。ウォーカブルは近年注目を集める「Well-being」向上に資する要素でもあり、その重要性は高い。

ウォーカブルなまちづくりによって、人々の徒歩移動はどの程度促進されているのだろうか。人々の移動について、どのような人が、いつ、どのような目的・交通手段で、どこからどこへ移動したかを調査する「パーソントリップ調査」の結果から分析した。2018年に実施した「第6回東京都市圏パーソントリップ調査」によると、東京都市圏の人口は増加しているにもかかわらず、人々の移動量（トリップ）は2008年の前回調査と比較して減少傾向にあり、徒歩でのトリップは約8.2%減少している。一方、調査が実施された2018年時点でウォーカブルなまちづくりに先進的に取り組んでいた地域では、域内における総移動量は減少しているものの、徒歩のトリップは増加している。流山おおたかの森で駅前の広場や高架下を活用した開発を進めた千葉県流山市では約29.8%、柏の葉スマートシティ実行計画を推進する千葉県柏市では約3.0%、池袋駅周辺で公園やオープンスペースを整備した東京都豊島区では約3.7%の増加となった。ウォーカブルなまちづくりによって、実際に人々の徒歩移動が活発化するといえる。こうした人々が歩きたくなる、立ち寄りたくなる空間づくりには、地域のにぎわいを創出する意義があり、それぞれの街に合ったウォーカブル推進の方向性を検討する必要があると考える。

図表 市区内における徒歩の移動量(トリップ)の変化



注) パーソントリップ調査は拡大推計結果である。目的を持った、出発点から到着点までの移動を1トリップとし、1日当たりの移動量を推計している。複数の交通手段を乗り換えた場合も全体で1トリップとし、徒歩を主な交通手段とする移動量を図表で取りまとめた

出所) 東京都市圏交通計画協議会「第6回東京都市圏パーソントリップ調査」(2018年実施)、「第5回東京都市圏パーソントリップ調査」(2008年実施)